



Title	『奥の細道』の制作過程について：曾良自筆本『奥の細道』の考察
Author(s)	杉浦，正一郎
Citation	語文. 1951, 2, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68369
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『奥の細道』の制作過程について

——曾良自筆本『奥の細道』の考察

杉 浦 正 一 郎

近頃、私の研究意欲をそゝらされてゐる問題は、芭蕉の制作過程を通して、芭蕉の制作心理を追及し、何故にかゝる推敲のプロセスを経て、成稿にみちびいたかの点を明かにしてみたいと云ふ課題である。この問題は、幸ひ芭蕉程、その成稿に至るさまの作品過程のよく判つてゐる作家はなく、発句・連句・文章の各々に互つて、

それぞれ確実な資料を挙げうるので研究資料には十分恵まれてゐるわけである。一、二の例を挙げてみると、曾良の『奥の細道随行日記』の発見によつて、細道旅行中の、その制作地に於ける芭蕉発句・連句の初案の形が知られ、其の後の再案、三案の形の知られることによつて、芭蕉の推敲のあとを如実に知りうるのである。又、かの幻住庵記の如きも成稿に至る幾通りかの形が今日知り得るし、且

つその推敲過程の苦悩を示す芭蕉の書簡ものこつてゐるので、その成稿に至るまでの苦心経営のさまは歴々と指摘出来るのである。

この問題は、芭蕉個人の制作の秘密に触れると共に、芭蕉がいかにして中世的なものを近世的なものに切りかへたか、韻文学界に於ける近世文学の開拓者たる名譽は何故に芭蕉に與へられねばならぬか、等の問題を、同時に或程度明らかにするであらう。

今、こゝに述べようとする課題は、私の右の意図による研究テーマの一環として、最近私の手許に入つた『奥の細道』の一写本をめくつて、研究の一端を述べてみようと思ふのである。

右の写本は、之も最近私が伊豆伊東の斎藤浩介氏の御好意により割愛をうけた曾良の『奥の細道随行日記』に附随してゐたものである。と、云ふより寧ろ、その傳來からすれば其の主従関係はまさしく逆であつた。両書が一緒に收められてゐた古い桐箱にも『細道』の方が主、『日記』の方が従とした箱書が書かれてゐるし、その箱の中に收められてゐる両書の譲り狀にもそのやうに認められてゐるのであつた。それは即ち若人自筆の次の一通である。

「 覚

一、芭蕉翁正筆、

奥の細道、一冊、井、

曾良旅日記、

右者河合曾良傳來ニ而

拙者所持之処今度就御所

望御譲申候事実正也

仍而如件

庚子四月十日 若人（署名の下に「若人」の陰刻朱印有）

助宣雅君

この讓狀の筆者若人は、もと上諏訪の人である曾良の傳來品を待ちつたへた事、及び筆蹟、筆紙の質からみて、かの幕末頃の信州諏訪住の著名俳人久保島若人のことと思はれる。若人は本名を権平と云ひ、高島藩士であつた。天理図書館蔵の當時の全国俳人の名簿である『俳家人名録』といふ大部な稿本には、

若人 上諏訪藩中

久保嶋権平

と見えてゐる。尾張の士朗門で、著書に『深川帖』『昔簀』『花繪』等があり、別に濤觀の号があつた。嘉永四年八月二十八日、八十九才で歿したと傳へる。この歿年からみて、日附の「庚子」は、天保十一年なる事が判るのである。讓り相手たる助宣は、その俳号の人は、當時の江戸俳人で、幕府の家士と云はれる結城平藏の助宣があるが、同人がどうか明らかでない。

さて、右の文中に云ふ如く、芭蕉翁正筆と傳へる『奥の細道』が主で、『曾良旅日記』と傳へるかの『奥の細道隨行日記』が従なのである。若人が曾良日記を傳來してゐた事は、古く遠藤白人の『蕉門諸生全傳』（文政年中稿本）の、曾良の條に

曾良日記

若人

スウ家來久保島久左衛門也

持傳ウ。

と見えてゐて、昔から知られてゐたらしいが『細道』の方はさうした話を一向きかないのである。若人は前記のその著書『花繪』（天保五年十月序）に、自分の秘藏する芭蕉自筆の「かげろふの我肩にたつかみこかな」の歌仙を模刻してゐて、その翁自筆歌仙も所藏してゐたらしく、さうした翁眞蹟類に関心を持つてゐた人である事が分

る。

ところが、今私の紹介しようとする『細道』は曾良日記と共に傳來したものではあるが、芭蕉正筆とはどうも考へられないものである。時代は正しく元祿のもので、紙質・筆蹟からみて芭蕉と同時代のものである事は明らかである。しかし芭蕉の自筆ではないのである。そこで考へるのに、この『細道』が果して若人の讓つた當時のものかどうかといふ疑問である。昨昭和二十五年六月号の岩波の『文学』に私は「奥の細道の一資料をめぐる」と題する一文を発表し、その中に本間本『奥細道菅菰抄』板本の朱の書入に次の重要な資料を見出した事を紹介した事がある。即ち、

先年信濃より出たりとて、祖師（註 芭蕉）眞筆の草稿に、曾良が腰帳を添て賣物に出たる事あり。松平志摩守との買上られたり。其御草稿には越後路の事も多く記し置れし也。さるを校合の時にや、朱あるひは墨もて十字に打消して有とそ。夫を見たる人の話也。其訛ハ註者の云る処、予の心に符合す。

——右の文章に云ふ芭蕉自筆の『細道』は実物を見た人の言によつて、今日我々のみてゐる本文とは異り、越後路の事も詳しく書きそれをちに朱や墨で十字に消してあつたものらしい。又、右に云ふ「曾良が腰帳」は、所謂『隨行日記』の原本が小型の横帖で、なるほど腰帳といふ名に適はしいものだから、『隨行日記』を正しく指してゐるものと思はれる。即ち文化文政の頃に、さうした芭蕉正筆『細道』の草稿が曾良の『隨行日記』と共に賣物に出たのであつた。

ところが、今度『隨行日記』と共に、私の手許に入つた『細道』は芭蕉の筆蹟に極めてよく似てはゐるが、翁の正筆ではなく、且つ

○	二〃二〃	やゝ年も暮春。立る。	春改れは、を立るに改む
◎	三〃	そゝろ神の物につきて	そゝろかみの、物に付て、とかみの、の下に朱の句読点有。且つ、付をつきと改む。
〇	四〃	心をくるハセ	こゝろをくるハセ
〇	六〃	笠の緒付かえて	付かへて、をえとし、又夫を消す
△	七〃	松島の月先心にかゝりて	心もとなしを、心にかゝりてと改む
〇	八〃	人に譲り	譲りて
〇	三〃二〃	ひなの家	雛の家
〇	三〃	面八句を庵の柱に消す	面八句を書て、を二字消す
〇	三〃	彌生も末の七日。明ほのゝ	彌生も末の七日、元祿二とせにや、明ほのゝ、と七字消す
※	四〃	月ハ在明にて光おさまれる	月ハ有あけてひかりおさまれる
〇	六〃	不二の峯	富士の峯
〇	七〃	又いつかはと	いつかわ、としはと改
〇	四〃六〃	行道なをすゝます	猶、とす
〇	五〃一〃	ことし元祿二とせにや	此たひ、を消して上の如く改む
〇	二〃	只かりそめに思ひたちて	たゝかりそめに思ひ立
		如上	如上

〇	三〃	重ぬといへ共。	重ぬといへとも
〇	四〃	いまた目に見ぬさかひ。	いまた目に見ぬ境
〇	五〃	定なき願の末をか。	定めなき願の末を架て、を、かけ、と改む
〇	六〃	け。	たとりて、をたとり着にけりと改む
〇	六〃	早加と云宿にたとり着にけり	にけりと改む
〇	六〃一〃	夜の防ぎ	夜ハ臥爲と云、を夜ルの防ぎと改む
〇	三〃	さりかたき錢など	花むけ
〇	四〃	打捨てたくて	捨てたたく、後にてを入る
〇	五〃	路次の煩となれるこそ	なるこそ、として後、間にれを入る
〇	六〃	室の八嶋に詣す同行曾良か	八嶋に詣ス曾良か、として後同行を入る
※	八〃	無戸室に入て	無戸室、と仮名ふる
〇	七〃	焼給ふ	焼たまふ
〇	七〃二〃	生れ給ひしより	うまれ
〇	七〃三〃	読習し侍も	侍るも
〇	七〃五〃	世に傳ふ事も侍し	侍ること
〇	七〃六〃	日光山の替に	麓
〇	八〃一〃	打解て休ミ給へと	打とけて休ミ給へと
〇	七〃	剛毅木納の	木納とし後訥に改む

○	〃	八	氣稟の清質	改む	智恵の、とし後氣稟と
※	九	四	空海大師開基の時	也	開記とし、後基と改む
〃	〃	七	栖隱なり		
※	〃	八	筆をさし置ぬ	改む	指置ぬ、とし後さしと
○	一〇	一	あらたうと		あなふと、としなを
〃	〃	五	曾良ハ河合氏に	上	に、同行とし、後削
〃	〃	七	惣五郎と云へり	り	に入る
〃	〃	七	このたひ松しま	此	たひ松嶋
〃	〃	一	悦ひ	よ	ろこひ
〃	〃	一	羈旅の難をいたハ	いた	はり、としいたは
〃	〃	一	らんと	ら	んと、と改む
△	二	二	墨染にさまをかえ	改め	又夫を消す
〃	〃	五	力ありて	力	有て
〃	〃	六	廿餘丁	二	十餘丁
※	〃	八	碧潭に落たり	碧	潭に落、とし碧と改
▽	〃	〃	岩窟に身を	岩	の下二字空白を朱に

〃	〃	八	夏之初	にせしか	夏の初、と朱にて振仮
△	〃	七	雨降日暮る	暮る	ゝ
〃	〃	三	情しらぬにハ非す	あらす	
〃	〃	四	されとも	され共	
△	〃	四	縦横にわかれて	東西縦横にわかれて	
〃	〃	六	ふみたかえん	ふみたかへむ、をえと	
〃	〃	七	馬を返し絵へとかし侍ぬ	返し給へと、ちいさきものふたり、とつゞけたるを、後、かし侍ぬの四字入る	
〃	〃	八	ちいさき者ふたり	ちいさきものふたり	
〃	〃	一	独ハ小姫にて	ひとりハ	
〃	〃	七	淨坊寺何かし	何某とし某を消して何かし、とす	
〃	〃	八	あるしの悦ひ	よろこひ	
〃	〃	四	日とひ郊外に	郊の字あいまいな字体なりしを朱にて郊と右に記す	
〃	〃	五	犬追物の	犬追ものゝ	
〃	〃	七	古墳を	墳とし後墳と改む	
〃	〃	八	それより八幡宮に	それ方	
△	〃	八	与市扇の的を射し	与市宗高の二字入れり	
〃	〃	〃	時		
〃	〃	〃	別してハ	別てハ	

一六〇二〇	此神社にて侍。と聞	此神社にて侍。と聞ハ
※三	しきりに覚えらる	しきり覚らる、とし後
〇		しきりにと朱にてを
〇		補ふ。又覚らるの右に
〇		朱にてラルと記す
〇		足駄をおかむ
〇		足駄を拜む
〇		仏頂和尚の山居跡。あ
〇		とのを二つ入る
〇		仏頂和尚の山居の跡有
〇		きこへ、とし後えと改
〇		道の程
〇		道のほど打さハき
〇		て
〇		彼琴に到る
〇		谷道遙に
〇		松杉黒く
〇		さてかの跡ハいつ
〇		くのほとにや
〇		後の山によちのほ
〇		れハ
〇		みるかことし
〇		庵ハやふらす夏木
〇		立
〇		とありあへぬ一句を
〇		柱に
〇		館代より

〇	短冊得させよと乞	短尺
〇	野を横に馬牽むけ	野をよこ馬挽むけよ
〇	よほとゝきす	郭公とし、後挽を牽
〇	清水なかるゝの柳	に改む
〇	ハ蘆野の	流るゝの柳ハ芦野の
〇	此所の郡守戸部某	郡守故戸部某とし、故
〇	を消す	
〇	此柳みせはや	見せはや
〇	の給ひ聞え給ふを	の給ひきこへ給ふを、
〇	とし後きこえと改む	
〇	けふこの	
〇	今日此柳のかけに	
〇	こそ	
〇	立より侍つれ	
〇	心許なき日かす	心もとなき日数
〇	白川の関	白河の関
〇	いかて都へと	みやこへ
〇	便求しも断也	便もとめしも断なり
〇	心をとむ	こゝろを
〇	秋風を耳に	秋かせ
〇	紅葉を佛にして	もみちを佛にして
〇	雪にもこゆる心地	こゝち
〇	そする	
〇	冠を正し	たいし
〇	晴着かな	哉

二三〃二〃	かけ沼と云所を	かけ沼、としけに朱の濁点ふる
〃 三〃	今日ハ空曇て	けふは
〃 四〃	等窮といふものを尋て	等窮といふものをたつねて、とし後窮を窮に改む
△ 六〃	といかにこえつるや	こえつるにや
〃 二四〃一〃	思ひめくらさす	おもひ
〃 四〃	脇第三とつゝけて	一巻となしぬ、として後に一を三に改む
〃 五〃	三巻となしぬ	後、とし後朱にて閑と改む
※ 七〃	大きなる栗の閑に覺られて	閑に、とし後朱にて閑と改む
〇 二五〃六〃	等窮か宅を	等窮、とし後窮と改む
〃 七〃	路より近し	道よりちかし
〃 八〃	やゝ近うなれハ	やゝちかふなれハ、とし「ふ」を後うに改む
二六〃七〃	忍ふのさ。とに行	忍ふの里
〃 八〃	石半。土に埋て	石の半、とし後のを削る
二七〃一〃	來りて教ける	をいへけるかとし、かを朱にて削る
〃 二〃	昔ハ此。山の上に	むかしはこの山の
〃 三〃	麦。草をあらして此。石を	麦、にムキと仮名振、この石と有

〃 四〃	石の面。下さまに	石のおもて
〃 七〃	手もとや昔。	むかし
〃 八〃	月の輪のわたしを	渡し
二八〃二〃	左の山際一里半斗	ひたりの山際一里半計
〃 四〃	禁に大手の	麓に
〃 五〃	人の教ゆるにまかせて	をいゆるに
〃 八〃	先哀也女なれとも	先あはれなり、をんなれ共
二九〃一〃	かひくしき名の世に聞えつる物かなと	かひくしき名の世に聞へつるもの哉と
二九〃三〃	寺に入て茶を乞へ	ちや
〃 六〃	笈も太刀も五月にかされ俗職	弁慶の笈をも、を消して、笈も太刀も五月にかされ、と改む
〇 〃	五月朔日の事也	也を消してにやと改む
〇 〃	温泉あれは	出湯を消して温泉と改む
※三〇〃二〃	灯もなけれハみろりの	ともい火。ゆるりの火、とし後みろりと改む
〃 三〃	寢所をまうけて臥す	ふす
〇 〃	臥る。上。より。もり	ふしたる。上に。雨もりて、を消して、ふせる上より、と改む
〇 〃	臥る。上。より。もり	如上
〇 〃	臥る。上。より。もり	如上
〇 〃	臥る。上。より。もり	如上

〇	八	悲しさも増りて	〇	五	かなしもとよみけ
〇	四一	人相のかねを聞	〇	四一	いと哀也
〇	二	夕月夜幽に離か嶋	〇	七	奥上るりと云もの
〇	三	もほと近し	〇	四二	ひなひたる調子う
〇	四	蟹の小舟	△	一	ち上て枕ちかう
〇	五	看わかつ声く	△	三	刃士の遺風忘れさ
〇	六	つなて	〇	四	るものから
〇	七	かなしもとよみけ	〇	五	塩かまの明神に詣
〇	八	かなしもとよみけ	〇	六	国守再興せられて
〇	九	かなしもとよみけ	〇	七	彩縁きらひやかに
〇	一〇	かなしもとよみけ	〇	八	九段に重り
〇	一一	かなしもとよみけ	〇	九	塵土の境まで神靈
〇	一二	かなしもとよみけ	〇	一〇	あらたに
〇	一三	かなしもとよみけ	〇	一一	塵土の境まで神靈
〇	一四	かなしもとよみけ	〇	一二	あらたに
〇	一五	かなしもとよみけ	〇	一三	塵土の境まで神靈
〇	一六	かなしもとよみけ	〇	一四	あらたに
〇	一七	かなしもとよみけ	〇	一五	塵土の境まで神靈
〇	一八	かなしもとよみけ	〇	一六	あらたに
〇	一九	かなしもとよみけ	〇	一七	塵土の境まで神靈
〇	二〇	かなしもとよみけ	〇	一八	あらたに
〇	二一	かなしもとよみけ	〇	一九	塵土の境まで神靈
〇	二二	かなしもとよみけ	〇	二〇	あらたに
〇	二三	かなしもとよみけ	〇	二一	塵土の境まで神靈
〇	二四	かなしもとよみけ	〇	二二	あらたに
〇	二五	かなしもとよみけ	〇	二三	塵土の境まで神靈
〇	二六	かなしもとよみけ	〇	二四	あらたに
〇	二七	かなしもとよみけ	〇	二五	塵土の境まで神靈
〇	二八	かなしもとよみけ	〇	二六	あらたに
〇	二九	かなしもとよみけ	〇	二七	塵土の境まで神靈
〇	三〇	かなしもとよみけ	〇	二八	あらたに
〇	三一	かなしもとよみけ	〇	二九	塵土の境まで神靈
〇	三二	かなしもとよみけ	〇	三〇	あらたに
〇	三三	かなしもとよみけ	〇	三一	塵土の境まで神靈
〇	三四	かなしもとよみけ	〇	三二	あらたに
〇	三五	かなしもとよみけ	〇	三三	塵土の境まで神靈
〇	三六	かなしもとよみけ	〇	三四	あらたに
〇	三七	かなしもとよみけ	〇	三五	塵土の境まで神靈
〇	三八	かなしもとよみけ	〇	三六	あらたに
〇	三九	かなしもとよみけ	〇	三七	塵土の境まで神靈
〇	四〇	かなしもとよみけ	〇	三八	あらたに
〇	四一	かなしもとよみけ	〇	三九	塵土の境まで神靈
〇	四二	かなしもとよみけ	〇	四〇	あらたに
〇	四三	かなしもとよみけ	〇	四一	塵土の境まで神靈
〇	四四	かなしもとよみけ	〇	四二	あらたに
〇	四五	かなしもとよみけ	〇	四三	塵土の境まで神靈
〇	四六	かなしもとよみけ	〇	四四	あらたに
〇	四七	かなしもとよみけ	〇	四五	塵土の境まで神靈
〇	四八	かなしもとよみけ	〇	四六	あらたに
〇	四九	かなしもとよみけ	〇	四七	塵土の境まで神靈
〇	五〇	かなしもとよみけ	〇	四八	あらたに
〇	五一	かなしもとよみけ	〇	四九	塵土の境まで神靈
〇	五二	かなしもとよみけ	〇	五〇	あらたに
〇	五三	かなしもとよみけ	〇	五一	塵土の境まで神靈
〇	五四	かなしもとよみけ	〇	五二	あらたに
〇	五五	かなしもとよみけ	〇	五三	塵土の境まで神靈
〇	五六	かなしもとよみけ	〇	五四	あらたに
〇	五七	かなしもとよみけ	〇	五五	塵土の境まで神靈
〇	五八	かなしもとよみけ	〇	五六	あらたに
〇	五九	かなしもとよみけ	〇	五七	塵土の境まで神靈
〇	六〇	かなしもとよみけ	〇	五八	あらたに
〇	六一	かなしもとよみけ	〇	五九	塵土の境まで神靈
〇	六二	かなしもとよみけ	〇	六〇	あらたに
〇	六三	かなしもとよみけ	〇	六一	塵土の境まで神靈
〇	六四	かなしもとよみけ	〇	六二	あらたに
〇	六五	かなしもとよみけ	〇	六三	塵土の境まで神靈
〇	六六	かなしもとよみけ	〇	六四	あらたに
〇	六七	かなしもとよみけ	〇	六五	塵土の境まで神靈
〇	六八	かなしもとよみけ	〇	六六	あらたに
〇	六九	かなしもとよみけ	〇	六七	塵土の境まで神靈
〇	七〇	かなしもとよみけ	〇	六八	あらたに
〇	七一	かなしもとよみけ	〇	六九	塵土の境まで神靈
〇	七二	かなしもとよみけ	〇	七〇	あらたに
〇	七三	かなしもとよみけ	〇	七一	塵土の境まで神靈
〇	七四	かなしもとよみけ	〇	七二	あらたに
〇	七五	かなしもとよみけ	〇	七三	塵土の境まで神靈
〇	七六	かなしもとよみけ	〇	七四	あらたに
〇	七七	かなしもとよみけ	〇	七五	塵土の境まで神靈
〇	七八	かなしもとよみけ	〇	七六	あらたに
〇	七九	かなしもとよみけ	〇	七七	塵土の境まで神靈
〇	八〇	かなしもとよみけ	〇	七八	あらたに
〇	八一	かなしもとよみけ	〇	七九	塵土の境まで神靈
〇	八二	かなしもとよみけ	〇	八〇	あらたに
〇	八三	かなしもとよみけ	〇	八一	塵土の境まで神靈
〇	八四	かなしもとよみけ	〇	八二	あらたに
〇	八五	かなしもとよみけ	〇	八三	塵土の境まで神靈
〇	八六	かなしもとよみけ	〇	八四	あらたに
〇	八七	かなしもとよみけ	〇	八五	塵土の境まで神靈
〇	八八	かなしもとよみけ	〇	八六	あらたに
〇	八九	かなしもとよみけ	〇	八七	塵土の境まで神靈
〇	九〇	かなしもとよみけ	〇	八八	あらたに
〇	九一	かなしもとよみけ	〇	八九	塵土の境まで神靈
〇	九二	かなしもとよみけ	〇	九〇	あらたに
〇	九三	かなしもとよみけ	〇	九一	塵土の境まで神靈
〇	九四	かなしもとよみけ	〇	九二	あらたに
〇	九五	かなしもとよみけ	〇	九三	塵土の境まで神靈
〇	九六	かなしもとよみけ	〇	九四	あらたに
〇	九七	かなしもとよみけ	〇	九五	塵土の境まで神靈
〇	九八	かなしもとよみけ	〇	九六	あらたに
〇	九九	かなしもとよみけ	〇	九七	塵土の境まで神靈
〇	一〇〇	かなしもとよみけ	〇	九八	あらたに
〇	一〇一	かなしもとよみけ	〇	九九	塵土の境まで神靈
〇	一〇二	かなしもとよみけ	〇	一〇〇	あらたに
〇	一〇三	かなしもとよみけ	〇	一〇一	塵土の境まで神靈
〇	一〇四	かなしもとよみけ	〇	一〇二	あらたに
〇	一〇五	かなしもとよみけ	〇	一〇三	塵土の境まで神靈
〇	一〇六	かなしもとよみけ	〇	一〇四	あらたに
〇	一〇七	かなしもとよみけ	〇	一〇五	塵土の境まで神靈
〇	一〇八	かなしもとよみけ	〇	一〇六	あらたに
〇	一〇九	かなしもとよみけ	〇	一〇七	塵土の境まで神靈
〇	一一〇	かなしもとよみけ	〇	一〇八	あらたに
〇	一一一	かなしもとよみけ	〇	一〇九	塵土の境まで神靈
〇	一一二	かなしもとよみけ	〇	一一〇	あらたに
〇	一一三	かなしもとよみけ	〇	一一一	塵土の境まで神靈
〇	一一四	かなしもとよみけ	〇	一一二	あらたに
〇	一一五	かなしもとよみけ	〇	一一三	塵土の境まで神靈
〇	一一六	かなしもとよみけ	〇	一一四	あらたに
〇	一一七	かなしもとよみけ	〇	一一五	塵土の境まで神靈
〇	一一八	かなしもとよみけ	〇	一一六	あらたに
〇	一一九	かなしもとよみけ	〇	一一七	塵土の境まで神靈
〇	一二〇	かなしもとよみけ	〇	一一八	あらたに
〇	一二一	かなしもとよみけ	〇	一二〇	塵土の境まで神靈
〇	一二二	かなしもとよみけ	〇	一二一	あらたに
〇	一二三	かなしもとよみけ	〇	一二二	塵土の境まで神靈
〇	一二四	かなしもとよみけ	〇	一二三	あらたに
〇	一二五	かなしもとよみけ	〇	一二四	塵土の境まで神靈
〇	一二六	かなしもとよみけ	〇	一二五	あらたに
〇	一二七	かなしもとよみけ	〇	一二六	塵土の境まで神靈
〇	一二八	かなしもとよみけ	〇	一二七	あらたに
〇	一二九	かなしもとよみけ	〇	一二八	塵土の境まで神靈
〇	一三〇	かなしもとよみけ	〇	一二九	あらたに
〇	一三一	かなしもとよみけ	〇	一三〇	塵土の境まで神靈
〇	一三二	かなしもとよみけ	〇	一三一	あらたに
〇	一三三	かなしもとよみけ	〇	一三二	塵土の境まで神靈
〇	一三四	かなしもとよみけ	〇	一三三	あらたに
〇	一三五	かなしもとよみけ	〇	一三四	塵土の境まで神靈
〇	一三六	かなしもとよみけ	〇	一三五	あらたに
〇	一三七	かなしもとよみけ	〇	一三六	塵土の境まで神靈
〇	一三八	かなしもとよみけ	〇	一三七	あらたに
〇	一三九	かなしもとよみけ	〇	一三八	塵土の境まで神靈
〇	一四〇	かなしもとよみけ	〇	一三九	あらたに
〇	一四一	かなしもとよみけ	〇	一四〇	塵土の境まで神靈
〇	一四二	かなしもとよみけ	〇	一四一	あらたに
〇	一四三	かなしもとよみけ	〇	一四二	塵土の境まで神靈
〇	一四四	かなしもとよみけ	〇	一四三	あらたに
〇	一四五	かなしもとよみけ	〇	一四四	塵土の境まで神靈
〇	一四六	かなしもとよみけ	〇	一四五	あらたに
〇	一四七	かなしもとよみけ	〇	一四六	塵土の境まで神靈
〇	一四八	かなしもとよみけ	〇	一四七	あらたに
〇	一四九	かなしもとよみけ	〇	一四八	塵土の境まで神靈
〇	一五〇	かなしもとよみけ	〇	一四九	あらたに
〇	一五一	かなしもとよみけ	〇	一五〇	塵土の境まで神靈
〇	一五二	かなしもとよみけ	〇	一五一	あらたに
〇	一五三	かなしもとよみけ	〇	一五二	塵土の境まで神靈
〇	一五四	かなしもとよみけ	〇	一五三	あらたに
〇	一五五	かなしもとよみけ	〇	一五四	塵土の境まで神靈
〇	一五六	かなしもとよみけ	〇	一五五	あらたに
〇	一五七	かなしもとよみけ	〇	一五六	塵土の境まで神靈
〇	一五八	かなしもとよみけ	〇	一五七	あらたに
〇	一五九	かなしもとよみけ	〇	一五八	塵土の境まで神靈
〇	一六〇	かなしもとよみけ	〇	一五九	あらたに
〇	一六一	かなしもとよみけ	〇	一六〇	塵土の境まで神靈
〇	一六二	かなしもとよみけ	〇	一六一	あらたに
〇	一六三	かなしもとよみけ	〇	一六二	塵土の境まで神靈
〇	一六四	かなしもとよみけ	〇	一六三	あらたに
〇	一六五	かなしもとよみけ	〇	一六四	塵土の境まで神靈
〇	一六六	かなしもとよみけ	〇	一六五	あらたに
〇	一六七	かなしもとよみけ	〇	一六六	塵土の境まで神靈
〇	一六八	かなしもとよみけ	〇	一六七	あらたに
〇	一六九	かなしもとよみけ	〇	一六八	塵土の境まで神靈
〇	一七〇	かなしもとよみけ	〇	一六九	あらたに
〇	一七一	かなしもとよみけ	〇	一七〇	塵土の境まで神靈
〇	一七二	かなしもとよみけ	〇	一七一	あらたに
〇	一七三	かなしもとよみけ	〇	一七二	塵土の境まで神靈
〇	一七四	かなしもとよみけ	〇	一七三	あらたに
〇	一七五	かなしもとよみけ	〇	一七四	塵土の境まで神靈
〇	一七六	かなしもとよみけ	〇	一七五	あらたに
〇	一七七	かなしもとよみけ	〇	一七六	塵土の境まで神靈
〇	一七八	かなしもとよみけ	〇	一七七	あらたに
〇	一七九	かなしもとよみけ	〇	一七八	塵土の境まで神靈
〇	一八〇	かなしもとよみけ	〇	一七九	あらたに
〇	一八一	かなしもとよみけ	〇	一八〇	塵土の境まで神靈
〇	一八二	かなしもとよみけ	〇	一八一	あらたに
〇	一八三	かなしもとよみけ	〇	一八二	塵土の境まで神靈
〇	一八四	かなしもとよみけ	〇	一八三	あらたに
〇	一八五	かなしもとよみけ	〇	一八四	塵土の境まで神靈
〇	一八六	かなしもとよみけ	〇	一八五	あらたに
〇	一八七	かなしもとよみけ	〇	一八六	塵土の境まで神靈
〇	一八八	かなしもとよみけ	〇	一八七	あらたに
〇	一八九	かなしもとよみけ	〇	一八八	塵土の境まで神靈
〇	一九〇	かなしもとよみけ	〇	一八九	あらたに
〇	一九一	かなしもとよみけ	〇	一九〇	塵土の境まで神靈
〇	一九二	かなしもとよみけ	〇	一九一	あらたに
〇	一九三	かなしもとよみけ	〇	一九二	塵土の境まで神靈
〇	一九四	かなしもとよみけ	〇	一九三	あらたに
〇	一九五	かなしもとよみけ	〇	一九四	塵土の境まで神靈
〇	一九六	かなしもとよみけ	〇	一九五	あらたに
〇	一九七	かなしもとよみけ	〇	一九六	塵土の境まで神靈
〇	一九八	かなしもとよみけ	〇	一九七	あらたに
〇	一九九	かなしもとよみけ	〇	一九八	塵土の境まで神靈
〇	二〇〇	かなしもとよみけ	〇	一九九	あらたに
〇	二〇一	かなしもとよみけ	〇	二〇〇	塵土の境まで神靈
〇	二〇二	かなしもとよみけ	〇	二〇一	あらたに
〇	二〇三	かなしもとよみけ	〇	二〇二	塵土の境まで神靈
〇	二〇四	かなしもとよみけ	〇	二〇三	あらたに
〇	二〇五	かなしもとよみけ	〇	二〇四	塵土の境まで神靈
〇	二〇六	かなしもとよみけ	〇	二〇五	あらたに
〇	二〇七	かなしもとよみけ	〇	二〇六	塵土の境まで神靈
〇	二〇八	かなしもとよみけ	〇	二〇七	あらたに
〇	二〇九	かなしもとよみけ	〇	二〇八	塵土の境まで神靈
〇	二一〇	かなしもとよみけ	〇	二〇九	あらたに
〇	二一一	かなしもとよみけ	〇	二一〇	塵土の境まで神靈
〇	二一二	かなしもとよみけ	〇	二一一	あらたに
〇	二一三	かなしもとよみけ	〇	二一二	塵土の境まで神靈
〇	二一四	かなしもとよみけ	〇	二一三	あらたに
〇	二一五	かなしもとよみけ	〇	二一四	塵土の境まで神靈
〇	二一六	かなしもとよみけ	〇	二一五	あらたに
〇	二一七	かなしもとよみけ	〇	二一六	塵土の境まで神靈
〇	二一八	かなしもとよみけ	〇	二一七	あらたに
〇	二一九	かなしもとよみけ	〇	二一八	塵土の境まで神靈
〇	二二〇	かなしもとよみけ	〇	二一九	あらたに
〇	二二一	かなしもとよみけ	〇	二二〇	塵土の境まで神靈
〇	二二二	かなしもとよみけ	〇	二二一	あらたに
〇	二二三	かなしもとよみけ	〇	二二二	塵土の境まで神靈
〇	二二四	かなしもとよみけ	〇	二二三	あらたに
〇	二二五	かなしもとよみけ	〇	二二四	塵土の境まで神靈
〇	二二六	かなしもとよみけ	〇	二二五	あらたに
〇	二二七	かなしもとよみけ	〇	二二六	塵土の境まで神靈
〇	二二八	かなしもとよみけ	〇	二二七	あらたに
〇	二二九	かなしもとよみけ	〇	二二八	塵土の境まで神靈
〇	二三				

9

六	七	七〇	二	三	五	六	八	五	三	四	六	五
平和泉と心さし	緒たえの橋なと聞 傳て	人跡稀に 路ふみたかえて	石の巻といふ湊に 出	海上に見わたり 竈の煙	思ひかけす所 にも	更に宿かす人なし 一夜をあかして	尾ふちの牧まの 萱はら	遙なる堤を行心細 き	其間廿余里ほと おほゆ	田野に成て		
心指、とし後さしと改 む	聞傳えて、とし後へと 改む	人跡とし、後ヒトを朱 にて消し、朱にて間に 入る	道ふみたかへて、とし 後たかえてと改め、又 夫を消す 出ス	海上、見渡シ けふり	おもひかけすかゝる所 にも	更宿かす、とに脱 明して	尾ふちの巻まの、かや はら、とし後巻を牧と 朱にて改む	はるかなる、心ほそき 二十餘里程と覺ゆ	なりて			

〇 八	長に ^{トシ} してめて度御山と謂 ^フ つへし	長 ^{トシ} にして目出度御山と可 ^レ 謂 ^フ とし返り点を
六七〇二	月山にのほる木綿しめ	月山に登 ^ル 木綿と朱にて振仮名す
四	雲霧山氣の中に氷雪を	雲霧山一氣の中に氷ハ朱にて下の四字には墨にて一をひく
六	雲関に入かと	雲一関
七	息絶身こゝえて	息一絶身こゝえて、とし、こゝへと改む、一は朱
八	頂上に臻 ^レ れは日没て月顯る	頂上に到 ^ル れは日没 ^{ホツシ} て月あらはる
六八四	此国の銀冶盞水を撰て	鍛一冶盞水を、と一は朱
五	潔齊して釵を打	潔一齊して釵を打
七	世に賞せらる	榮と誤り、賞と改む
〃	龍泉に釵を淬とか	龍一泉に釵を淬とかやと一及び振仮名朱
八	むかしをしたふ	昔を
六九三	やすらふほと三尺	やすらふ程、三尺斗なる
〃	はかりなる	
四	半ハひらけるあり	半ハに

〃	五	春を忘 ^ル れぬ遅さく	はるをわすれぬ遅櫻の
〇	七	ら	如上
七〇一	山中の微細	行尊親王の哥の哀も爰に思ひ出て猶まさりて覚ゆ	行尊親王の哥の哀も増りて覚ゆ、と改め、哥も爰に思ひ出て猶哀も増りて覚ゆ、とつゞく
三	筆をとめて記さす	徴一細しるさす	
四	阿闍闍の需に依て	阿闍梨の求に依て	
五	短冊に書	短尺	
八	湯殿にぬらす袂かな	哉	
七一	錢ふむ道の泪かな	なみた	
三	物のふの家に	ものふの	
〇七二	酒田の湊に下る	みなとに下る	
一	暑き日を海にいれ	暑き日を海に入れた	
〃	たり最上川	る、としるるを朱にて	
二	数を盡して	りに改む	
三	方寸を責	責 ^{ツク} ふ、と朱にてふの字	
四	磯を傳ひいさこをふみて	磯をつたひいさこを踏	

七	鳥。海。の。山。か。く。る	鳥、海と朱にて一を入
八	闇中に莫作して雨も又奇也と	闇、中…奇なり、一は朱
七三	雨後の晴色	雨、後の晴、色 （はじめの一は朱、あとののは墨）
二	膝をいれて	入て、とし後、いれと改む
二	雨の晴を待	雨の晴る、いを待
三	天能霽て朝日花やかにさし出る	晴て…指出る
七	花の上こくとよまれし	読れし
七四	此処に行幸ありし事	この処に御幸、とし御を消して行と改む
四	いまた聞す	きかす
七	鳥海天をさゝえ	さゝへ、をえと改め、又夫を消す
八	江にあり	江に有
七五	海北にかまえて	かまへてのへをえとし、又消してへとす
三	浪打入る所を	入る、
四	江の縦横	縦横
五	松嶋ハ笑ふか如く	松しまはわらふか
六	寂しさに悲しみを	さひしさにかなしひを

七六	雨に西施かねふの花	くはへて、としへをえと改め、又へとす
五	ミのゝ国の商人	美濃国商人
六	戸板を敷て夕涼	夕すゝみ
七	簀をみる	見る
七七	遙々のおもひ	遙遙とし、後下の遙を消して々とす
三	加賀の府まで百卅里	府の字あいまいなりしを府と改む百三十里と書
五	越中の国一ふりの関	一ふり、と朱にて濁点ふる
七	暑濕の劣に神をなやまし病おこりて	暑、濕の…病をこりて、とし朱にて一を入れ、をを後におと改む
七八	今日ハ親しらす	けふハ
六	一間隔てるが素顔の面に （板本ハ西、ともよめ、自筆本は明らか）	この曾良自筆本も明らかに面
七	若き女の声二人斗ときこゆ	をい…二人計と
八	年老たるおのこ	年寄たる

七九〇四	あすハ古郷にかへす文したゝめて	古里に…したゝめ
八〇〇一	物云をきく	聞
二〇	あした旅立に	旅たつに
五〇	御跡をしたひ侍ん	侍らん
八〇	涙を落す不便の事にハ侍れとも	なみたを落す…事にハおもひ侍れとも
八一〇二	只人の行にまかせ	唯
四〇	かならず悉なかるへし	必つゝかなかるへし
〇	云捨て出づる哀さ	云捨て出づゝあはれさ
八〇	くろへ四十八ヶ瀬	くろへ、四十八ヶ瀬
八二〇二	春ならすとも	共
四〇	是より五里いそ傳	是は…磯つたひして
〇	ひして	
※	山陰にいり蟹の苦ふき	山陰に入、蟹の芦ふき…とし、芦を笛に改む
〇	かすかなれは蘆の一夜の	かすかなれハ、一夜の宿
八〇	いひをとされて	のを補ふ
八三〇一	分入右は有磯海	云いおとされて、とし、おををに改む

〇八五〇一	太田の神社に詣。眞盛が甲	大坂より。かよふ商人何処と云者
△	時往昔源氏に属せし	大坂ハ…云もの
〇	盛が甲	う、こけ
〇	義朝公より。給へらせ給とかや	秋、いし…爪天、茹とけ加ふ
〇	目庇より	し、天を消し、子をつ
〇	眞盛討死の後	秋の風
〇	縁記にみえたり	諸の下に爲、藤別、当ありしを消す
〇	白根か嶽跡にみな	其昔
〇	左の山際に観音堂あり	方、□へらせ給ふ、とあいまいな字体なりしを朱にて消した。まと改む
〇	那谷と名付給ふと	射死とし、後討と改む
〇	奇石さまく、に古	見え
〇	奇石さまく、に古	見なして
〇	奇石さまく、に古	左りの…有
〇	奇石さまく、に古	那谷、と振仮名有
〇	奇石さまく、に古	奇名さまく、に古
〇	奇石さまく、に古	松、とし後壘にて奇

△八八〃一〃	其功有明に次と云	朱にて石と改む
〃 三〃	山中や菊ハたおらぬ	有間、と有、 たをらぬ、とし後おと 改む
〃 七〃	風雅に辱しめられ	辱 ^{ハツカシ} られて、と朱にて 振仮名有
〃 八〃	洛に帰て	歸りて
○八九〃三〃	今更むかし語とハ なりぬ	物かたりとハ成ぬ、と し、後物を消す
〃 六〃	先立て行に	先立て旅立行に、とし 旅立を後に消す
〃 七〃	行 ^レ てたふれ伏 とも	ゆき ^レ て
○九〇〃一〃	隻鳥のわかれて	隻鴨とし、後鳥に改む
〃 三〃	今日よりや書付消 さん	けふよりや
〃 四〃	全昌寺といふ寺に とまる	云寺に泊る
△〃 六〃	此寺に泊て、終宵 秋風聞や	泊りて、終夜
〃 八〃	一夜の隔千里に同 し吾も	おなし我も
九一〃一〃	秋風を聞て衆寮に 臥は	聴て衆寮に臥バ
〃 二〃	明ほのゝ空近う読	明ほのゝ空ちかふ(朱

如上

〃 五〃	堂下 ^ニ 下るを若き 僧とも	に ^ニ ころと改む(読経聞 ふ板鐘鳴て、とし之
〃 六〃	紙硯をかゝえ	改読 ^ニ 声スムマ、ニ ^ニ と 鐘の板を消し て鐘の下に板を入る
○九二〃一〃	庭掃て出はや寺に 散柳	庭掃て出はや寺にちる 柳
〃 二〃	とりあへぬさまし て草鞋なから	とりあへぬ、句草鞋な から、とし一句を朱に 消してさましとと朱 書にて補ふ
〃 四〃	舟に掉して汐越の 松を尋ぬ	掉指て尋、とありし を指てを消してと し、尋の下にスと朱に て入る
△〃 六〃	終宵風 ^ニ に波を	終夜
〃 八〃	此一首にて ^ニ もし 一辨を	を、この一首にて ^ニ 若一辨
九三〃四〃	北枝といふもの	云もの

〇九四〇二〇	七〇	思ひつゝけて 物書て扇引さく余 波哉	おもひ 物書て扇引割、名残哉、 とし割の字を消してさ くと改む
〃	六〇	跡をのこし絵ふも 貴きゆへ有	跡を残し給ふも貴き故 有
〃	九五〇一〇	たそかれの路	道
※	三〇	古き隠士有いつれ の年にか	隠士と誤り後士と改む、 いつれの年にやと有 をしゆ
〃	八〇	そこくと教ゆ	夕顔は、かゝり、とし はえかゝりてと朱にて 入る
九六〇一〇	三〇	さてハ此うちにこ そ	扱は
〃	七〇	此あたり何かしと 尋給へといふ	このあたり何某と云
九七〇五〇	五〇	つるかのみなとに とたひ立	湊にと旅立
〃	八〇	路の枝折とうかれ 立	道の
九八〇二〇	六〇	橋をわたりて玉江 の蘆ハ穂に出にけ り	渡りて玉江の芦は穂に 出けり、として後にに を入る
※	五〇	燧か城かへるやま 火打か城、とし火打を	火打か城、とし火打を

〃	六〇	十四日の夕くれ	消して燧と改む、かへ る山、とす
〃	八〇	その夜	夕暮、 其夜
九九〇二〇	二〇	越路の習ひ猶明夜 の陰晴はかりかた しと	ならひ明夜のはかり 難し、とし後明夜の上 に猶入る
一〇〇〇三〇	三〇	土石を荷ひ泥浮を	土石を荷泥浮を、とし 荷ヒと朱にてヒを入る
※	七〇	遊行の砂持	遊行、砂持、とし後朱に てのを入る
一〇一〇五〇	五〇	十六日空霽たれは 種の浜に	空晴たれは、種の浜、 と朱にてイロと振仮名 す
〃	八〇	破籠小竹箇など	さいへ、を消して小竹 箇と改む
一〇二〇三〇	三〇	吹蕭ぬ濱ハわつか なる海士の小家	吹付ぬ、瑯の、とし付 を消して蕭と改む
〃	五〇	法花寺あり爰に茶 を飲	法華寺有爰にちやをの み
〃	六〇	夕くれのさひしさ 寂しさや須磨にか ちたる	夕暮の さひしさやすまに勝た る、とし勝を消してか ちと改む

○ 一〇三〃二〃	其日のあらまし	日記とし、後之を消し てあらましと改む	如上
〃 四〃	此みなとまで出む かひて	このみなと迄	
〃 六〃	駒にたすけられて	駒をはやめて、と有を 消して、にたすけられ て、と改む	如上
〃 七〃	曾良も伊勢より來 り合	伊勢よりかけ合、とし かけを消して來り、と 改む	如上
○ 一〇四〃三〃	日夜とふらひて蕚 生のものに	日夜とふらひてふた ひ蘇生の、としふた ひを消す	如上
〃 四〃	且悦ひ且いたへる	且よろこひ且なけき て、としてなけきてを 消していたへると改む	
〃 五〃	旅の物うさも	ものうさ	
〃 八〃	又舟にのりて	又ふねに乗て	
○ 一〇五〃二〃	ふたみにわかれ行 秋そ	別行秋そ	(以上)

以上、大体会良自筆本の内容を、漢字仮名の違ひに至るまで詳細に校異を記して來たのであるが、この曾良自筆本が芭蕉の草稿の姿を傳へてゐると考へられるので、芭蕉の草稿を想像する意味から、紙数のかさむのを怖れつゝ出來る大詳細に異同を註記して來たのである。なほ本文は朱筆で句読点が全文に打たれてゐて解釈上に色々

と問題を提供して呉れるのである。河西本との校合は、勝峯氏の註記が恐らく重要なものゝみにとゞめて居られるらしく簡單なので、右に記した位しか知り得ないのは残念であるが、大体この曾良自筆本の系統のものである事が推定出來ようかと思ふ。勝峯氏は近頃上梓された其の力作「日本文学大成本」の『芭蕉全集』(上巻)の『奥の細道』の解説中に、この河西本について次のやうに説明して居られる。即ち、

曾良傳本 信州諏訪で大正十二・三年頃と思ふ。教育会の人が案内して、曾良の遺品を襲藏する甥周徳、すなはち曾良の『雪丸げ』^{更本}を開板した——その後裔の河西家を訪れ、臺岐の勝本から送還した硬箱や何々の外に、『奥の細道』の写本があつた。「彌生も末の七日明ぼのゝ空」が「末の七日」の次に、「元祿二年にや」を挿入し、「ことし元祿二とせにや」のところが、「此たび」から、「奥羽長途の」へ續いてゐる。おや、奇怪に感じつゝ、異同を隨所に見て、光堂の

五月雨や年々降て五百たび
螢火の晝は消つゝ柱かな

此二句を墨消しとしてあるので、或は芭蕉眞蹟の本文は、かう、書いてあるのではないかと疑問を抱いたのである。これが曾良の筆写であるなら、驚異的存在であるけれど、後人紙と墨の匂ひ、新らしさの漂ふ点が、私をして文政以後の副写本であることを鑑別させた。曾良日記は当時既に越後の酒造家とかへ譲られて、河西家には傳來しなかつた。本文の異同は俳書大系の『芭蕉一代集』に註記してあるから参考された。

此の勝峯氏の解説によつて河西本の全貌を想像出來ると思ふ。然し

て、右に云はれる曾良の筆写本が此の度現はれたわけである。

野坡が芭蕉の三十三回忌追善集として上梓した『放生日』(寛保十一年刊)の巻頭扉に「芭蕉翁眞蹟」と云ふ『おくのほそ道』の図を載せてゐるが、此本は所謂枳形本でなくタテ長の本で私の曾良自筆本と形は似てゐるやうだが、「墨附三十二葉」とあつて、私の本の三十五葉とは三葉すくないのである。私の藏本は、芭蕉の草稿と字配りもおなじにするためであらう、各行の下の方は処々字をつめて書いてゐる形跡があつて、臨写した草稿と枚数なども同じにしてゐるらしいから、『放生日』に記す野坡傳來の翁正筆本とはその拠つた本がちがふやうである。幻住菴記が幾通りもあるやうに、この『奥の細道』も素龍に清書させるまで幾通りも芭蕉は書いたものと思はれ、その一本が越路の方も詳しく書かれてゐたといふ早い草稿であり、その他の一本が野坡傳來本であり(或は右の本と同一なのかも知れぬが)、又その他の一本が曾良の筆写した一草稿であつたのであらう。前に挙げた異同表によつて知らるゝ如く、この曾良の臨写した芭蕉の草稿は、越路の辺を詳記してあつた草稿よりもつと精撰された後の稿本、成稿本と異同の大して多くないところからすると、成稿になる直前の未定稿であつたのではなからうかと思はれる。曾良は之を写してのち、更に決定稿によつて校合を加へたものらしい。

異同表のあたに○△※等の印をつけてみたのは、異同の内容を明らかにするために便宜つけてみたので、○印は芭蕉の推敲のあとを示すと考へられる個所であり、当面の問題の資料となるべき点である。△印は決定稿との異同で、之は大した異同はないけれども、僅かに異同のあるのは、校合の際の曾良の見落しであるか、又は曾良のみた決定稿がさうなつてゐたのか、其の点は明らかにし難い。

思ふ。次の※印は草稿を写したときの曾良の不注意による誤りと考へられるものである。最後に○の印をつけたのは從來問題になつてゐる点が、この本にどうなつてゐるか注意される個所である。

なほ、曾良自筆本は全文に互つて朱で句読がうつてあり、例へば冒頭の部分は、

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也、舟の上に生涯をうかへ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす、

と云つた調子であるが、処々朱の書入あるのと同じ朱色であり、且つ朱の書入は曾良の筆蹟と思はれるので、恐らく曾良が句読を打つたものと思はれ、さうした点から少くとも曾良のよみ方が推量出来るのである。この句読が芭蕉の草稿にあつた句読をそのまま写したものであるならは参考になると思はれるがそこまでの事は分らない。少くも曾良はかうよんでゐたといふ事までは言へさうである。それですぐに問題になるのは、例のそごろ神の個所である。即ちその辺の部分を少し長く引用してみると、

(予の二子後より入る)

いつれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやます、

海浜にさすらへて、去年の秋江上破屋に、蜘蛛の古巢をはらひて、

やゝ年も暮、春改れば、霞の空に、白川の関こえむと、そゝろか

みの、物に付てこゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取

もの手につかず、もゝ引の破をつゝり、笠の緒付かへて、三里に

余すゆるより、松嶋の月先心もとなし、住る方は人に譲りて、杉

風が、別墅に移るに

(付、予、つぎ、と入る)

(改れば、を消し、さす)

(もとなし、を消して、かゝりて、とす)

(へ、をえにかへ、又)

(をえにかへ、又)

(をえにかへ、又)

(をえにかへ、又)

(をえにかへ、又)

(をえにかへ、又)

草の戸も住替る代そ雛の家

面八句を（書て、を指す）書て庵の柱に懸置、

以上の如くである。即ち、そざるを副詞とみるよみ方ならば、そゝろとかみの間に句読がある筈だが、さうでないところをみると、曾良はやはり、そざる神といふ一つ言葉に解してゐたものと考へられる。今異同表にかうした句読の問題は触れえなかつたけれど、ところどころにかういふ問題への暗示を與へられる点があるので、之等の事については後日を期したいと思ふ。

それから、十一頁の八行目、裏見の瀧の條に、曾良自筆本「碧潭に落たり」のあと「岩窟に身を」といふところ、岩の下二字を空白にしてをり、後朱筆で「窟に」と入れてゐるのは如何解すべきであらうか。之は恐らく芭蕉の草稿の字跡がよみにくかつたために空白にして写し、後に補つたものであらうか。右の他、芭蕉の字の難読のため、そのまゝ臨写しておき後に正しくしてゐる例が他にも三四あるやうに思はれる。

二十四頁七行目、須賀川の軒の栗の條、「榛ひろふ太山もかくやと□に寛えられて」といふところ、□の箇所、はじめ門ガマへの中に片假名のタを入れたやうな字を書き、後朱筆で「閑」と改めてゐる。之も曾良にとつて難読であつたのであらう。

三十二頁三行目、養輪笠島の「條の是より遙右に見ゆる山陰の里をミのわ笠嶋と云」といふところ、地理的には左の笠なので從來問題があり、種々の説が出てゐるがこの曾良自筆本もはつきりと右と書いてゐる。先頃発見された西村家の素龍自筆本にも明らかに右となつてゐるので、之から考へると、芭蕉の草稿に、左となつてゐ

たのを素龍が右と誤つたのだといふ説より、曾良もかく明瞭に右と書いてゐる事から思ふと、芭蕉の草稿自体が既に右と誤記されてゐたものと考へられる。曾良の『奥の細道隨行日記』、同じく『俳諧書留』、『猿蓑』所出の此の句の詞書等すべて左とあるから、之は恐らく誤記であつたのであらう。桃隣の『陸奥衛』にも左とある。

三十九頁三行目、壺碑の條に「むかしよりよみ置る哥枕おほく語傳ふといへとも、山崩川流て道あらたまり」といふところ、井筒屋板本の素龍本等は「川落て」とあつて意味を成さないのを、この曾良自筆本は素龍自筆本と共に、「川流て」となつてゐて、之が芭蕉の正しい文章だつたと思はれる。

四十五頁二行目、松島の條に、「敬ものハ天を指、ふすものは波に簡匳」といふところ、板本の素龍本は簡匳とあるが、素龍自筆本と、この曾良自筆本とは共に、門の中に甫の字と門の中に冨の字を書いてをり、曾良本は之に墨で「ハラハウ」と振仮名してゐる。両者とも芭蕉の草稿のまゝに写したものと思はれる。

五十六頁四行目、尿前の関の條の「蚤風馬の尿する枕もと」の句、從來多く「馬のシト、する」と読んでゐるのは、尿前の地名にひかれてよみたい心理もあるかと思はれるが、曾良は「ハリ」と振仮名してゐるから、馬のバリするとよんでゐたものであらうか。

六十一頁三行目、立石寺の條、「岩に巖を重ねて山とし」とあるところ、曾良本はじめ「岩尾」とし、のち「巖」の字にかへてゐるところをみると、やはりあとの字は岩尾とよむべきであらう。從來も多くの人はいさうよんでゐたと思はれるけれど、之ではつきりするやうに思ふ。

七十八頁六行目、市振の條に「一間隔て面の方に」といふところ板本の字、面とも西ともよめて甚だ心許ないが、曾良自筆本は素龍自筆本と共に「面」となつてゐて、オモテをよむべき事を決定する。

九十二頁一行目、全昌寺の條の「庭掃て出はや寺に散柳」の句は素龍・曾良両自筆本ともに『鳥の道』など共に「出はや」とあつて、板本の「出るや」は、「は」の変体仮名のよみ違ひによる誤りと思はれる。

九十三頁の「丸岡天龍寺の長老」といふのは丸岡は明らかに松岡

の誤記であるが、之は曾良素龍両自筆本ともに「丸岡」とあるから松岡への途中にある丸岡を芭蕉が記憶ちがひで草稿そのものが誤つてゐたものらしい。

さて、このあと、芭蕉の推蔵のあとをたどつて、芭蕉の制作過程の問題に觸れてゆきたいと考へてゐたけれど、既に與へられた紙数を倍以上も超過してをり、私の病氣のため締切日も随分延ばしてゐたといふので、本論を他日に期する事にして此度は、曾良本の全貌を紹介した丈にとどめておきたいと思ふ。(一九五・一二)